

語彙の記憶形態と英語の学習

中 村 嘉 宏*

(1993年10月15日 受理)

Word Associations in EFL Learning

—S-P Shift and its Implications for EFL Learning—

Yoshihiro NAKAMURA

成人学習者の場合、年少者に比べ、英語(外国語)の習得が難しいということがよく言われる。さまざまな要因が想定されているが、理由の1つに語彙の記憶形態の違いを指摘することができる。語彙の記憶形態は年齢差と同時に個人差に関わる問題でもあり、これまで、この問題について英語(外国語)教育の分野で十分な調査がなされてきたとは言い難い。本論では、英語(外国語)教育において語彙の記憶形態が示唆する内容について、外国語学習の最適年齢(optimum age)や学習者の認知スタイル(cognitive style)などの視点を採り入れながら、以下、論じてみることにしたい。

§ I 語彙の連合(記憶)構造——統合的關係(syntagmatic relations)と選択的關係(paradigmatic relations)

言語内には無数の語彙が存在している。個々の語彙項目はそれぞれに意味構造を成し、相互に統合的または選択的な関係を形成している。しかしながら、どの言語であれ想定される語彙の組み合わせがすべて無原則に容認されているわけではない。語彙の組み合わせは、たとえば、形態素における音素(文節音)の組み合わせ同様、複雑な言語体系の中で多様な規則性を有している。言語の意味構造を反映する語彙の記憶形態には、大別して、統合的なものと選択的なものがあり(例-I参照)、年齢が増すにつれて、徐々に変化するとされている。いわゆるS-P Shift (syntagmatic-paradigmatic shift)と呼ばれる言語現象で、5~9歳を境に、成人の場合、それ以前の統合的な語彙記憶よりも選択的な語彙記憶の傾向が顕著になるとされている。¹⁾

* 鹿児島大学教育学部外国語科

例- I

{	my	}	{	new	}	{	car	}
{	the	}	{	old	}	{	book	}
{	his	}	{	big	}	{	pen	}
{	that	}	{	ugly	}	{	bag	}

In the above example, the phrase “my new car” consists of three elements (words). Any of the words listed in the same columns could substitute for them to make another equally valid phrase, such as “the new bag.” Hence, “car” stands in a paradigmatic relation with “book,” “pen” and “bag,” because each of these words can occur in the context (or paradigm) “my new _____.” “Car” stands in a syntagmatic relation with “my” and “new,” because they combine to form the noun phrase “my new car.” (17: 67)

年齢的に8歳前後を境とするこのS-P Shiftについては、これまでに語彙の連想テスト (word association test) や語法テスト (usage test) を含む多くの実験・調査報告がなされており (3: 229-240, 8: 19-29, 14: 548-557), 外国語学習との関連でいえば, 学習の最適年齢 (optimum age) といわれる人間の成長期 (4~10歳頃) と時期的にはほぼ一致している。

S-P Shift 現象と人間の成長・発達段階との多様な関連については第3章で触れることにし, 本論では, 以下, 言語の意味構造と表裏一体の関係にある語彙の連想構造(体系) についてさらに詳しくみてゆくことにしたい。

§ II 語彙の相互的諸関係——意味構造を中心に

異なった語彙項目相互の多様な結合性についてその文法的・意味的適格性を体得することは, 英語(外国語) 学習において意思伝達能力 (communicative competence) の基底を構成することになる。同時に, この能力の発達は言語の予測能力 (expectancy) や創造性 (creativity) とともに密接な関連があり, 知識としての言語から運用としての言語に至る外国語の習得過程において学習者が獲得し内化すべき不可欠の言語知識といえるものである。以下に紹介するのは, 構造的な意味の相関性を基準に, 語彙の記憶形態について選択的關係および統合的關係を軸にまとめた (1) Clark (5: 271-286) および (2) Lyons (13: 443-481) の分類である。両者の視点は必ずしも一致しているとは言えないものの, 共に語彙の選択的關係について詳しい記述がなされており, 語彙の記憶形態の分析から意味構造の一端が明らかにされている。²⁾

(1) Clark の分類

① 選択的關係—以下に示すさまざまな選択規則に基づく。

(i) 選択規則 (paradigmatic rules)

a) 最小対照規則 (minimal-contrast rule)—反意性 (antonymy) に適用され, 語彙の選択

的關係の中では最も例が多い。

例：long– short, good– bad, high– low, big– little, up– down, male– female, man– woman, boy– girl, he– she, aunt– uncle, above– below, to– from, give– take, sell– buy, go– come, here– there, this– that, now– then,

b) 有標規則 (marking rule) — 最小対照規則 (minimal-contrast rule) と区別し難い場合がある。

例：dogs– dog, better– good, brought– bring, man– woman, they– them, careless– careful, thoughtful– thoughtless, useless– useful, he– she, her– him,

c) 特性削除・追加規則 (feature-deletion and -addition rules) — 削除規則 (deletion rule) が追加規則 (addition rule) に優先し、上位語と下位語、および同義語の關係が生ずる。

例：apple– fruit (deletion), fruit– apple (addition), kill– die, teach– learn, feed– eat, listen– hear, house– home, odour– smell, seem– appear, thing– object, big– large, look– see, show– see,

d) 範疇保持規則 (category-preservation rule) — 第一義的な意味特性が保持される。

例：yellow (*a.*)– blue (*a.*), apple (*n.*)– orange (*n.*),

② 統合的關係 — 以下に示す統合規則に基づく。

(i) 統合規則 (syntagmatic rules)

a) 選択特性具現規則 (selectional feature realization rule) — 規則としての適用度は低く、主として、動詞、副詞(不変化詞を含む)、形容詞が対象になる。

例：young– boy (girl, child, man, people), get along, seem like, try out, red– apple,

b) イディオム完成規則 (idiom-completion rule) — イディオムの前出語が刺激語となる場合に適用され、イディオムが完成される。

例：cottage– cheese, whistle– stop, white– house, stove– pipe, justice– peace, so– what, ham– eggs, needle– thread, bread– butter, how– now,

成人の被験者は、Clark によれば、語彙の刺激・反応形態の特徴から次の3群にグループ化できるとされている。第1群では、特徴として刺激語に対する反応が速く、反応語彙には対照語 (contrasts: big– little, man– woman) や等位語 (co-ordinates: yellow– blue, apple– orange) が多くあられ、また、第2群の場合、刺激語に対する反応は第1群に比べ時間的に遅く、反応語彙には同義語 (synonyms: big– large) や上位語 (super-ordinates: apple– fruit) が多くあられるとされている。第1群、第2群とも語彙記憶の形態は選択的とみなされている。これに対して、第3群の特徴は、第1群に比べ、刺激語に対する反応は時間的にかなり遅く、刺激語と反応語の關係も第1群、第2群の場合とは異なって、機能的な連想傾向 (functional associations: red– apple, needle– thread) を示し、語彙記憶の形態は統合的とみなされている。ここで指摘されている第3群の存在は、S-P

Shift の発生や外国語学習との関連で注目されてよいが、これと類似の内容は、筆者が実施した語彙連合に関する日・米比較調査の分析結果からも追認されている(第3章参照)。

Clark は、この他、品詞に関して触れ、S-P Shift が発生する時間的な順序として、(名詞)→(形容詞)→(動詞)→(副詞)の順に遅くなることを指摘している。同様に、Brown and Berko (4: 1-14) も、品詞の順序について、(可算名詞, 形容詞)→(動詞, 副詞)→(物質名詞)とする見方を示しており、それぞれ、語彙の拡大過程において品詞による順序性があることを示唆している(註2参照)。

(2) Lyons の分類

Lyons はここでとりあげた語彙の選択的関係の例はいくつかの可能性を示したものであり、必ずしも網羅的なものではないとしている。

① 選択的關係

a) 同義性 (synonymy) — 語彙項目相互の置換が常に可能な訳ではない。

例: liberty— freedom, hide— conceal, conception— idea,

b) 包含性 (hyponymy) — 上位語 (例: vehicle) が下位語 (例: car, bus など) を包含する。

例: scarlet— red, animal— bull (elephant), vehicle— car (bus), color— green (yellow, white),
flower— tulip, go— fly (drive),

c) 不一致 (incompatibility) — 包含性の逆で排除性を示す。

例: morning— not afternoon (not evening, not night),

d) 相補性 (complementarity) — 語彙項目相互の否定性を示す。

例: male— female, perfect— imperfect, single— married,

e) 反意性 (antonymy) — 相対的な対立関係を示し、語彙相互の置換が常に可能な訳ではない。

また、一方が無標 (unmarked) の場合が多い。

例: cold— hot, good— bad, young— old, dry— damp (moist, wet), high— low, big— small,
few— many,

f) 逆意性 (converseness) — 一方が他方の逆を意味する。

例: husband— wife, brother— sister, parent— child, buy— sell, employee— employer,
teach— learn, son— daughter,

② 統合的關係

a) 連語 (collocation) — 語彙項目が共起性 (co-occurrence) に関して制約を受ける。

例: 形容詞+名詞, 主語+動詞, 動詞+目的語, 動詞+副詞, 動詞+前置詞句,

b) 慣用表現 (idiom) — 連語を含む。

例: lose one's head, a dolly bird, kith and kin, give up, look after, know one's onions,

Clark および Lyons の記述は、共に、語彙の選択的および統合的關係を含む意味構造の分析には

個々の語彙項目がもつ意味素性の詳細な記述が必要なことを示している。言い換えれば、外国語の言語運用能力を構成する1つの要素として語彙相互の選択的および統合的關係を可能にし、また、不可能にしている語彙の意味素性と統語素性に関する構造的な規則(禁則)体系が学習者の側に言語認識として徐々に確立され、さらに、内化される必要があることを示すものといえよう。

§Ⅲ 語彙の記憶形態と S-P Shift —— 日・米比較

本章では、これまでみてきた S-P Shift 現象(語彙記憶の形態変化)が人間の比較的早い成長段階(5~9歳頃)で生ずることと英語(外国語)教育との間にどのような関連性があるのかを考えてみたい。

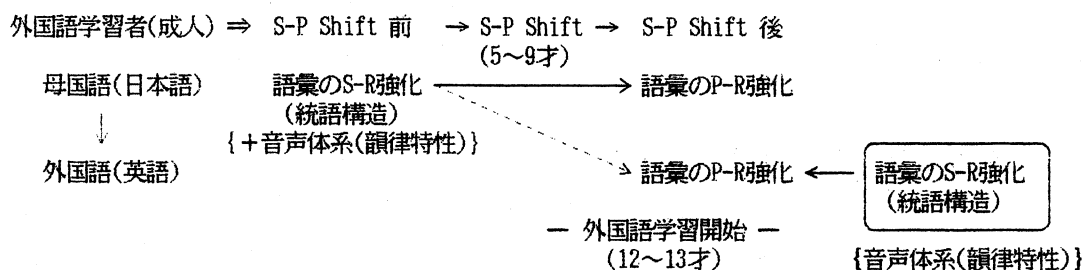
一般に、5歳前後の幼児は日常の家族生活において既に言語(母国語)による意思伝達が可能である。このことは、S-P Shift が生ずる以前、すなわち、語彙記憶の形態が S-R (syntagmatic relations) の段階において、基本的に、母国語の統語構造と音声体系(韻律特性)の機能的な知識が内化されていることを示している。ところで、我が国の英語(外国語)教育は、殆どの場合、中学校初学年で導入され、年齢的には S-P Shift 後の12~13歳で開始されている。このことは、学習者(成人者)が、英語学習にあたって、語彙の統合的な記憶形態の段階を経ず、一般的な傾向として、英語の語彙項目を選択的に記憶し、統語構造と音声体系を主として母国語(日本語)で代用する学習方略(learning strategy)を採ることを意味している。

成人学習者の場合、前章において触れたように、年齢的には、選択的な語彙記憶の形態が次第に強化される傾向にあり、このため、学習語彙は主として選択的關係の枠内で増えることにしても、これらの語彙を目標言語の統語構造と音声体系のなかで一体的に運用することが次第に難しくなってくる(11: 153-167)。英語(外国語)の教師は、長年にわたる学習指導を通して、このような傾向を経験的に理解している場合もあるが、本論でとりあげた S-P Shift 現象はこのような事象の原因を説明し、同時に、その矯正法、言い換えれば、入門期における文法(統語)構造の理解と音声言語学習の重要性を指摘するものといえよう。

ところで、人間の成長・発達段階にあつて S-P Shift とほぼ同時期に生ずる言語現象に外国語学習の最適年齢(optimum age)の問題がある。4~10歳頃とされるこの年齢期を過ぎると、個人差はあるにしても、一般に、人は聴覚的(また、視覚的にも)外国語の統語構造の習得が次第に難しくなるとされている(12: 203-206)。また、最適年齢との関連で、人間の成長・発達過程において10歳前後を境にそれまでの条件付け学習(conditioned learning)から論理的推理や抽象的思考に基づく概念学習(conceptual learning)へと学習形態に変化が生ずるとの報告もなされている(1: 298-306)。先に触れた S-P Shift 現象と相俟って、このような変化は、母国語の統語構造や音声体系からの干渉が次第に強くなる成人学習者の場合、外国語学習への取り組みを一層困難にする要因となるものであり、この点からも、外国語学習初期の段階において、とくに、スピーキングの導入を遅らせ、リスニング(聴覚理解)の指導を優先することの重要性が浮き彫りになってこよう(図-I参照)。

図-I

—— 語彙記憶の傾向 ——



S-P Shift と語彙の記憶形態の問題は、本章において後述するように、さらに、学習者個人の認知スタイル(cognitive style)とも関連が予測され、また、個人に特徴的な語彙記憶の形態は外国語の言語適性(FL aptitude)を構成する1要素とも解釈できる側面をもっている*。

これまで論じてきたように、S-P Shift 現象には英語(外国語)教育との関連でさまざまな意味合いが包蔵されている。筆者は、かつて、S-P Shift 現象を具体的に検証するため、日・米両国の大学院生を被験者に筆記による予備的な1種のアンケート調査(語彙の連想テスト)を行ったことがある。以下、この調査の内容と結果、また、今後の問題点について報告したい。

(1) 語彙記憶に関する日・米比較調査

本調査は1992年2月から6月にかけて実施したもので、被験者は英語専攻の日本人大学生(年齢21~24歳)、男子7名、女子25名、計32名と言語学専攻の米国人大学生・大学院生(年齢19~47歳)、男子9名、女子23名、計32名である。調査(英語の語彙テスト)は被験者が在籍するそれぞれの大学(大学院)で実施し、テスト項目には刺激語彙として4つの品詞から36語を使用した。被験者には語彙テストの目的は知らされず、与えられた刺激語から直接連想する語彙を筆記するように求められた。刺激語彙の内訳は以下の通りである：名詞12語(可算名詞6語、不可算名詞6語)；動詞12語(自動詞6語、他動詞6語)；形容詞6語；副詞6語。本調査は被験者とテスト項目が共に比較的少なく今後の研究の予備的調査といえるものであったが、調査の分析結果から以下にみるようにさまざまな事柄が外国語習得との関連で浮き彫りになった**。

(2) 調査結果が示唆するもの

S-P Shift 現象と英語(外国語)教育との関連性について本調査で得られた内容をまとめれば、概略、

* 拙論 “Foreign Language Aptitude in Foreign Language Learning” 『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』, Vol. 40, pp. 163-202, 1988.

** 本テストの実施にあたっては、米国、ワシントンD.C.のGeorgetown大学大学院国際文化センター言語学科教授 Charles C. Kreidler 博士のご協力を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

以下のようになる。

- 1) 語彙記憶の形態には個人差があり、成人の場合、選択(P-R)型の他、S-P Shift 説では説明し難い統合(S-R)型、さらに、選択型と統合型の間隔的な型の3形態が認められる。既に触れたように、選択(P-R)型の場合、Clark は、下位区分として2つの異なった傾向が認められることを報告している(第2章参照)。
- 2) 品詞別または品詞間で異なった語彙記憶の傾向は認められなかった。
- 3) 成人の場合、一般に、語彙の記憶形態が選択型の傾向を示す学習者が多くを占めると予測される。
- 4) 英語の母国語話者と日本人学習者がもつ英語語彙の連想構造の相違について顕著な傾向は認められなかったが、反応語彙については社会・文化的な背景を反映し異なった傾向が認められた。
- 5) 語彙の記憶形態の個人差とIQとの相関は本調査では不明であるが、記憶形態の個人差と性別または年齢の相関は共に認められなかった。
- 6) 選択型の語彙記憶の形態をもつ学習者の場合、統合型の学習者に比べ、特に、外国語学習初期の段階では不利となるため、学力上位群に統合型の学習者が比較的多く含まれると予測される。このことは、一方で、強い選択型の傾向をもつ学力下位の学習者の場合、語彙の統合的な記憶を促進することが学習不振にたいして1つの矯正法(remedy)になることを示唆している。
- 7) 語彙の記憶形態の個人差と外国語学習の聴覚型(aural)、視覚型(visual)との関係では、統合型+聴覚型の傾向をもつ学習者が、外国語の学習には、有利と予測される。* 語彙の記憶形態は認知スタイルの1カテゴリーと思われるが、認知スタイル(cognitive style)の他の主要なカテゴリー、たとえば、場面依存型・独立型(field dependent/independent)、熟慮型・衝動型(reflective/impulsive)などとの関連についても、認知スタイルに関する筆者のこれまでの調査から、外国語学習に有利な型の組み合わせを予測することは可能である。本調査との関連では、統合型+聴覚型+場面独立型+中庸的な熟慮型の組み合わせをもつ学習者を1つの例として想定することができる。**
- 8) 語彙の記憶形態の個人差が生得的なものか否か、即ち、言語的な訓練の対象となり得るか否かについて、これまでの調査では不明であり、今後の課題となっているが、プログラム学習(programmed learning)に基づく教材や指導方法、また、学習者の自己概念(self-concept)を高めるような学習指導による動機づけの強化などによって外国語学習に不利となる要因を補うことはできるように思われる(9: 121-132)。

外国語の習得過程では社会・文化的な外的要因から学習者個人の内的要因に至るまでさまざまな

* 聴覚型(aural)と視覚型(visual)については、羽鳥博愛著『講座・英語教授法 第10巻 英語学習の心理』, pp. 109-121, 研究社, 1970. を参照されたい。

** 拙論 “Interactive Effects between IQ and Cognitive Styles on Achievement in EFL Learning—A Pilot Study” 『鹿儿島大学教育学部研究紀要』, Vol. 35, pp. 241-250, 1984., “Understanding Student Learning Styles and Attitudes through Cognitive Style Characteristics and Locus of Control” 『英語教育学研究』, pp. 82-93, 大修館, 1987.

要素が複合的に関与し、学習の促進・阻害に影響を与えている。阻害要因を除き、その矯正方法を探ることは、外国語学習に欠かせない長期的な学習意欲の喚起ともつながってくる。このような意味からも、外国語教育の分野において、S-P Shift 現象とそれが示唆するものについて、今後、さらに、学習者の要因、とくに、認知スタイルとの関連で調査を深めてゆく必要がある。^{*}

§IV 統合的な語彙記憶を強化する要因

これまで、本論では、S-P Shift 現象を中心に、語彙記憶の2つの形態について触れ、主として、統合的な語彙記憶の形態について英語(外国語)教育における重要性を論じてきた。第2章でみたように、選択的および統合的な語彙の記憶形態は共に表裏一体の関係にあり、相互補完的な性質をもつものといえようが、本章では、以下、統語構造の理解力を重視する観点から、統合的な語彙の記憶を強化・促進する言語的な要因について4つの視点から考えてみることにしたい(16: 27-32, 6: 131-168)。

①連鎖動詞(catenatives)―準動詞(不定詞, 分詞, 動名詞)を含む

例) That is what compels me to keep working to help end this problem.

We found it a lot of fun to relax on the beach watching surfers riding on a big wave and falling off, losing their balance.

I listened to him playing the piano.

She wanted me to write a letter for her to the company complaining about one of their products.

They carried on the studies to prove their plan to be effective.

I don't like my sister going to such a place.

We'll keep making an effort to keep the costs under \$1,000.

通常、発話の多くは(準)動詞を含んでいる。名詞のみによる意思疎通も可能ではあるが、たとえば、特定の話題について対話を行う際、また、手紙を書く場合、(準)動詞を含まない発話や文を用いることは稀である。動詞の統語素性に関する正確な知識は外国語の習得に欠かせないものであり、上記①で示した連鎖動詞の用法に注意を向けることで、学習者は意識的または無意識的に外国語の統語構造を体得することになる。この知識を獲得することは連語(collocation)の知識を増大させることにもなり、語彙の統合的な関係を記憶・保持する上で、学習者にとって有益なものといえよう。

②修飾語句(限定語)×被修飾語句―形容詞×名詞, 副詞×動詞, 副詞×形容詞, など

例) Do you have any evidence to prove that he keeps writing nasty letters to you?

They will make a lovely picture.

* 学習者の要因と認知スタイルについては、三浦省五編『英語教育学モノグラフシリーズ 英語の学習意欲』, pp. 26-57, 大修館, 1983. を参照されたい。

He explained how he decided to take a positive attitude to the situation.

He expects to produce dramatic results of his research in less than a year.

He has improved his writing skills in English immensely.

語彙の修飾×被修飾の関係はさまざまな品詞の間で生ずるが、この組み合わせは言語内の意味規則によって制約があり、学習者の母国語からは予測や類推ができない場合も多い。目標言語の語彙を修飾×被修飾の組み合わせとして理解・記憶することにより、統合的な語彙の記憶形態が促進され、また、習得のレベルが上がるにつれて、発話者の心的態度、言い換えれば、感情(心理)表現のさまざまなレベルの違いを明示したり、同一表現の単調な繰り返しを避けるのにも役立てることができよう。

③不変化詞 (particles) — 冠詞, 前置詞, 副詞, など

例) Did he well on the quiz on Monday?

Let me take down your name and address.

She works for a bank. She studied at Georgetown University for four years.

He went talking about the recent trend in trade friction between the two countries.

She went to her father's hometown to spend her summer vacation with his parents.

He's been planning on setting up a business with his old friends from college for months.

I got a letter from Mr. and Mrs. Smith about their daughter's wedding to Mr. George Gibbs in June.

I can't come to the party at your house on July 4.

不変化詞の知識は発話の統語構造を維持する上で欠かせないものである。統語的には名詞や動詞との結び付きが強く、これらとの組み合わせで理解し、また、応用することで、この場合もまた、上記①、②同様、成人学習者にとって必要な統合的な語彙の記憶を助長することになってこよう。

④上記3要素を含む文の拡大

例) He is obviously using public funds to introduce himself to the voters for his upcoming election.

After two days of inquiries from a reporter about the apparent contradiction, staff members of the Committee held a meeting Friday to come up with a clear answer.

Two firebombs described as molotov cocktails were thrown onto tracks of JR line last night, delaying train traffic for about 30 minutes.

No one reported having seen the firebombs thrown onto the tracks of JR line near the station.

No injuries were reported in the accident, which occurred near the station in the area at about 9:30 p.m.

個々の語彙項目がもつ外延的・内包的意味の理解に加え、語彙の統合的知識は、統語構造を成す

(構)文の構成要素として語彙を運用するためにも必要である。これまで①～③項で触れた内容を相互に有機的に運用することで、適切な言語使用相(register)や表現の自然さ(nativeness)を伴った統合的な語彙の使用が徐々に可能になってくる。語彙の統合的關係に関する知識を基に、さらに、埋め込み(embedding)の知識を活用することで学習者は意思伝達能力の幅を広げ、外国語を自由な自己表現、また、情報伝達の媒体とすることで言語経験を重ね、学習の進展とともに、必然的に、目標文化への関心を深め、いわゆる“2言語・2文化的な思考態度”(bilingual-bicultural mentality)を自律的に涵養することにもなつてこよう(2: 449-465)。

本論の最初にも述べたように、言語内にあつて統合的な語彙關係を構成する場合、語彙項目相互の文法的な組み合わせがすべて容認されている訳ではない。外国語の統語構造と語彙の統合的關係を理解することは外国語習得の基礎を形成するものであり、学習のすべての段階において漸進的に拡大・強化していく性質のものといえよう。*

結 語

本論では、これまで、(1) S-P Shift 現象と語彙の記憶形態、(2) 語彙の記憶形態と意味構造の分析、(3) S-P Shift 現象と外国語学習最適年齢および認知スタイルとの関連性、(4) 語彙記憶における英語語彙の統合的關係を促進する諸要因の分析、について論じてきた。とくに、第3章ではS-P Shift 現象と外国語学習の最適年齢が人間の成長・発達段階においてほぼ同時期に生ずることと関連し、入門期におけるリスニング(listening comprehension)指導の重要性を指摘した。外国語の統語構造を聴覚的に理解し口頭で運用する基礎的能力の養成は、たとえば、最近では、'Comprehension Approach'や'Total Physical Response Approach'などでも強調されており、一方、学校教育においても『学習指導要領』の改訂やFLESの試行的導入によって音声英語の指導に力が注がれる傾向にあり、その重要性は、特に成人学習者の場合、本論で取り扱ったS-P Shift 現象が示唆する内容によつても裏付けられよう。

Abstract

The present paper underlines the need to give precedence to aural comprehension over oral production in the initial stages of EFL teaching. One of the ideas behind this is the hypothesis that from about 5 to 9 years of age children go through a 'syntagmatic-paradigmatic shift' (S-P Shift) — a change in the mnemonic style of retaining vocabulary. The theory of 'S-P Shift' states that children may have acquired as early as this age the functional core of the 'coordinate system' governing the phonology, syntax, semantics and morphology of their native language, and that ever-growing morphology afterward facilitates advances in the system that are ultimately reflected in improved language performance. The results of a questionnaire on word associations given to graduate and undergraduate students, native and nonnative speakers of English, show that the subjects (Ss) are consistent in their response to

* Foss and Hakes (10: 183-201) は、音声言語にみられる「言い淀みの休止」(hesitation pauses)や「言い間違い」(speech errors)の分析に基づいて、文産出における記号化の単位(encoding unit)を節(または句)とする見方を示している。

the stimuli, vindicating what has so far been reported on the S-P Shift. The analysis of the results also suggests that the individual differences in mnemonic style among the Ss may be a reflection of cognitive style differences.

The 'S-P Shift' has potential ramifications to consider in the field of EFL teaching. In connection with the change in memory styles in childhood, section three touches on a possible relationship between 'S-P Shift' and 'Optimum Age' for FL (foreign language) learning. Both supposedly occur at the same developmental stage of growth. This coincidence shows how much harder it becomes for people to acquire aurally or even visually syntax of a new language after this stage. The assumed linkage, if valid, promises to be another potential bolster for 'aural precedence' at the very beginning level of EFL courses.

Some examples are given in the last section to facilitate syntagmatic vocabulary learning for EFL adult learners. Most adult learners have already gone through the S-P Shift and they tend to be paradigmatic in the process of their EFL vocabulary building, memorizing vocabulary in paradigmatic structures. A few show the child's type of syntagmatic association. The implications of the S-P Shift lead us to the conclusion that EFL zero adult beginners with rather a strong P-R (paradigmatic-relation) tendencies should be encouraged to try to concentrate on learning the syntax of the target language aurally.

【註】

- 1) Brown and Berko は S-P Shift 現象について、語彙の連想テストと語法テストの結果に基づいて、次のように述べている (4: 11-12)。

The change with age in both free association and usage is very striking when one examines individual protocols. For free association, consider the stimulus words *to send*. One first grade child responds *away*, another *letter*, another *card*, another *mail*, etc. In response to this same word adults give: *to receive*, *to get*, *to deliver*, *to bring*, *to mail*, *to fetch*. Both the child responses and the adult responses are semantically related to the stimulus word, and the one set does not seem to be any more so than the other. The difference lies with the fact that the child responses are phrase completions (words that commonly follow the stimulus) while the adult words would almost never follow *to send* in an English sentence but are very closely matched with it ... In general, then, both the free association results and the usage results seem to be manifestations of the developing organization of vocabulary into syntactic classes.

- 2) Clark, Lyons とは別に、Moran および Emerson & Gekoski は統合的・選択的な語彙相互の関係を以下のよう

に分類している。

(1) Moran の分類 (15: 862-865)

① 選択的關係 (paradigmatic relations)

a) functional (e.g., table- chair)

b) logical (e.g., dog- animal) — synonyms, superordinates, contrasts, coordinates を含む

② 統合的關係 (syntagmatic relations)

a) iconic (e.g., apple- red)

b) enactive (e.g., apple- eat)

(2) Emerson & Gekoski の分類 (7: 1116-1121)

① 選択的關係 (paradigmatic relations)

a) interactive (e.g., train- tracks) — Moran の分類では, functional に相当する。

b) categorical (e.g., train- bus) — Moran の分類では, logical に相当する。

人間の発達段階における選択的關係の時間的な発生の順序として, Emerson & Gekoski は, (interactive) → (categorical) の順に遅くなるとする見方を示している (第2章参照)。

References

1. Andersson, T., "The Optimum Age for Beginning the Study of Modern Languages" *International Review of Education*, Vol. 6, No. 3, pp. 298-306, 1960.
2. Bachman, L. F. and A. S. Palmer, "The Construct Validation of Some Components of Communicative Proficiency" *TESOL Q*, Vol. 16, No. 4, pp. 449-465, December 1982.
3. Bousfield, W. A., "The Occurrence of Clustering in the Recall of Randomly Arranged Associates" *Journal of General Psychology*, Vol. 49, pp. 229-240, 1953.
4. Brown, R. and J. Berko, "Word Association and the Acquisition of Grammar" *Child Development*, Vol. 31, pp. 1-14, 1960.
5. Clark, H. H., "Word Associations and Linguistic Theory," in *New Horizons in Linguistics*, Lyons, J. (ed.) pp. 271-286, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1970.
6. Dechert, H. W. & P. Lennon, "Collocational Blends of Advanced Second Language Learners: A Preliminary Analysis," in *Contrastive Pragmatics*, Oleksy, W. (ed.) pp. 131-168, Amsterdam, the Netherlands: John Benjamins Publishing Co., 1989.
7. Emerson, H. F. and W. L. Gekoski, "Interactive and Categorical Grouping Strategies and the Syntagmatic-Paradigmatic Shift" *Child Development*, Vol. 47, pp. 1116-1121, 1976.
8. Entwisle, D. R. et al., "The Syntactic-Paradigmatic Shift in Children's Word Associations," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, Vol. 3, pp. 19-29, 1964.
9. Ferguson, G. A., "On Transfer and the Ability of Man" *Canadian Journal of Psychology*, Vol. 10, pp. 121-132, 1965.
10. Foss, D. J. and D. T. Hakes, *Psycholinguistics An Introduction to the Psychology of Language*, Prentice-Hall, 1978.
11. Jarman, R. F., "Cognitive Processes and Syntactical Structure: Analyses of Paradigmatic and Syntagmatic Associations" *Psychological Research*, Vol. 41, pp. 153-167, 1980.
12. Larew, L. A., "The Optimum Age for Beginning a Foreign Language" *MLJ*, Vol. 45, No. 5, pp. 203-206, 1961.
13. Lyons, J., *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge Uni. Press, 1974.
14. McNeill, D., "A Study of Word Association" *JVL-VB*, Vol. 5, pp. 548-557, 1966.
15. Moran, L. J., "Comparative Growth of Japanese and North American Cognitive Dictionaries" *Child Development*, Vol. 44, pp. 862-865, 1973.
16. Pocheptsov, G. G., "Syntagmatic Types of the English Verb and their Classroom Study" *LL*, Vol. 17, Nos. 1-2, pp. 27-32, 1967.
17. Taylor, I., *Introduction to Psycholinguistics*, Holt, Rinehart & Winston, 1976.